

欧州に学ぶ脱・無縁社会への挑戦 第3回

フランスに学ぶ ～「隣人祭り」によるコミュニティ活性化

2012.08.01

プラチナ社会研究センター 主任研究員 松田智生

ポイント

- ・フランスで、年に一回ご近所が集まる「隣人祭り」が広がっている。
- ・隣人祭りをきっかけとして、近所の連帯感や共助が広がり、コミュニティの活性化につながっている。
- ・隣人祭りは市民だけではなく、行政や企業も加えた三方一両得をもたらしている。

■隣人祭りとは

あなたは最近、ご近所との交流があるだろうか？ 表札の無いマンションが増え、町内会が衰退するなど、隣人とのつながりは希薄になる一方ではないだろうか？ 地域コミュニティの衰退が言われて久しい日本と同様、フランスにおいても独居老人の孤立死や若者の引きこもり、働き盛り世代の地域とのつながりの少なさが問題になっている。そうしたなかで、隣人祭りという挑戦が始まっている。

隣人祭りは、5月の最終金曜日に簡単な料理や菓子、お茶やワインを持ち寄り、近隣の交流を深めるイベントだ。今まで知らなかったご近所同士で話が弾み、仲良くなるきっかけとなる。隣人祭りの効果は多様だ。隣人に子供の送迎の手伝いを頼んだり、バカンス中のペットを預かったり、風邪気味の高齢者の買い物を手伝ったりと、共助によるコミュニティの活性化につながっている。

隣人祭りは、1999年パリの一画でたった30人の参加者で始まった。その後、各地の自治体の賛同を得てフランス全土で開催されるようになり、さらには32ヶ国・約1千万人（2010年時点）が参加する世界的なイベントになっている。日本にも隣人祭りの支部が開設されている。

■NPO 代表の熱い思い

隣人祭りを推進するのは、NPOの欧州隣人連帯協会だ。代表のペリファン氏は「孤立や無関心という現代社会の問題と戦いたい」と熱く語る。

「隣人祭りを立ち上げたきっかけは、私自身が孤立死の発見者になったことです。現代の社会では、ネットで見ず知らずの人と、簡単に友達になろうとするのに、お隣さんには声をかけようもしない。お

かしなことです。社会のつながりには、家族や友人や学校や職場がありますが、隣人は大切な存在なのです。」

ペリファン氏は目を輝かせて続ける。

「隣人の連帯感が深まり、人間らしさが溢れる、そんなコミュニティを目指しているのです。」

■効果は市民・行政・企業の三方一両得

隣人祭りは、市民だけではなく行政や企業にもメリットをもたらす。

コミュニティの衰退や独居老人の見守りコストに悩む自治体にとっては、隣人祭りが予防の役割を果たす。また、祭りの当日に向けて地元の商店街やスーパーでのワインやチーズの購入が増えたり、祭りの後は隣人の協力関係が強まって郵便の不在配達のコストが軽減できたりする。大手スーパーや郵政公社は隣人祭りのスポンサーであるが、社会貢献だけではなく、実ビジネスで有益と考えているのだ。

隣人祭りは、市民・行政・企業の三方一両得をもたらしている。

■成功の秘訣 一歩踏み出して実行する

もちろんこうした取り組みにはさまざまな課題がある。隣人同士がプライバシーを公開することで、逆に何かトラブルがあったらどうするかなど、懸念材料は常に存在する。

NPO 代表のペリファン氏は語る。

「世の中に 100%安全などありません。それよりもリスクや失敗を恐れて何もしない方が問題であり、それは罪と言えるでしょう。こうしている間にも、社会の孤立や無関心は進行しているのです。まずは一歩踏み出して実行することが重要なのです。」

フランスの隣人祭りは、日本にも多くの示唆を与えている。日本でも昔から隣組や町内会、井戸端会議など隣人を大切にする文化があった。元来、和の国である日本に出来ないはずはない。新たな挑戦をする際に、出来ない理由を幾ら並べても何も解決しない。ペリファン代表の「リスクを恐れて何もしないことは罪」、「まずは実行すること」という言葉が全てを表している。

さて、あなたは脱・無縁社会に向けてどんな一歩を踏み出すだろうか？



隣人祭り NPO 代表のペリファン氏と筆者

◇隣人祭りのホームページ (<http://www.immeublesenfete.com/>)

◇隣人祭りの様子 (http://www.immeublesenfete.com/index.php4?coe_i_id=61)